総評２０２４年７月分　杉本真維子

「去年今年伸びるキリンの首湿る」小里京子（北海道）
日付ののびやかさを思い浮かべました。キリンの柄もパターン化しているようでそうではない日常を思わせます。

「にんげんを水辺に誘う夜の声」松下　誠一（東京都）
「にんげん」とひらがなで表記しただけで、人間はまったく得体の知れないものになるようです。水辺で何をしているのか。知りたいような知りたくないような、ふしぎな魅力を感じます。

「夏盛りアボカド割れば海と島」深町　明（福岡県）
手元の夏！ 割るときの手ごたえがリアルな生の重みとつりあうかのようです。

「堂々と水飲む よわい花のまま」雲理そら（大阪府）
「ド」の音の力強さと花のよわさのあわいに〝人〟がうまれています。

「棒アイス／食べたら消えるものだけがほしい／あいつは来なかった補講」鈴木たなか（京都府）
人間は「時間」に食べられている、ということでしょうか。単純でわかりやすいものへの憧れが、複雑でわかりにくい〝人間〟を映し出しています。

「戦するあなたの脳へ／入り込み何があなたを／そうさせたのか知りたい」風太（宮城県）
自分だったらどうするだろう、と想像することで他者へと近づいていく、というより、自己の奥深くへ分け入ることが他者へと分け入ることなのかもしれません。憑依的創作とはこのように普遍性へと届こうとする行為なのだ、とも思いました。

「地肌揉むと地肌動くぞ夏の星」吉沢　美香（宮城県）
動く頭皮からはじまる、地表の異変。球体としての頭から惑星へと跳躍するダイナミックな視点。面白いです。

「水底となるまで泣くよ蝸牛」吉沢　美香（宮城県）
詩としかいいようのない構図だと思います。

「青空へ／落下してゆくシャンデリア／掻きむしるほど言葉は遠い」常田　瑛子（山口県）
脳内の観念のうごきを言語化するとこのようになる、という見本のよう。理屈を超えて、腑に落ちるものがあります。

「ねむの花酔えば楷書になる声の」大西　美優（広島県）
酔いとは一つの夢なのでしょう。輪郭のはっきりとした、淀みのない声に、惹かれます。

「そそそそって鳴く換気扇／陽射しが足りないから／扇風機になれない嘆き」茶和鈴（東

京都）
モノを軽視しないこのまなざしは貴重でしょう。ではサーキュレーターは？という問いも受け入れてくれそうな懐の深さもあります。

考えさせられる作品が多かったように思います。よい刺激をいただき、感謝しています。次回も楽しみにお待ちしています。